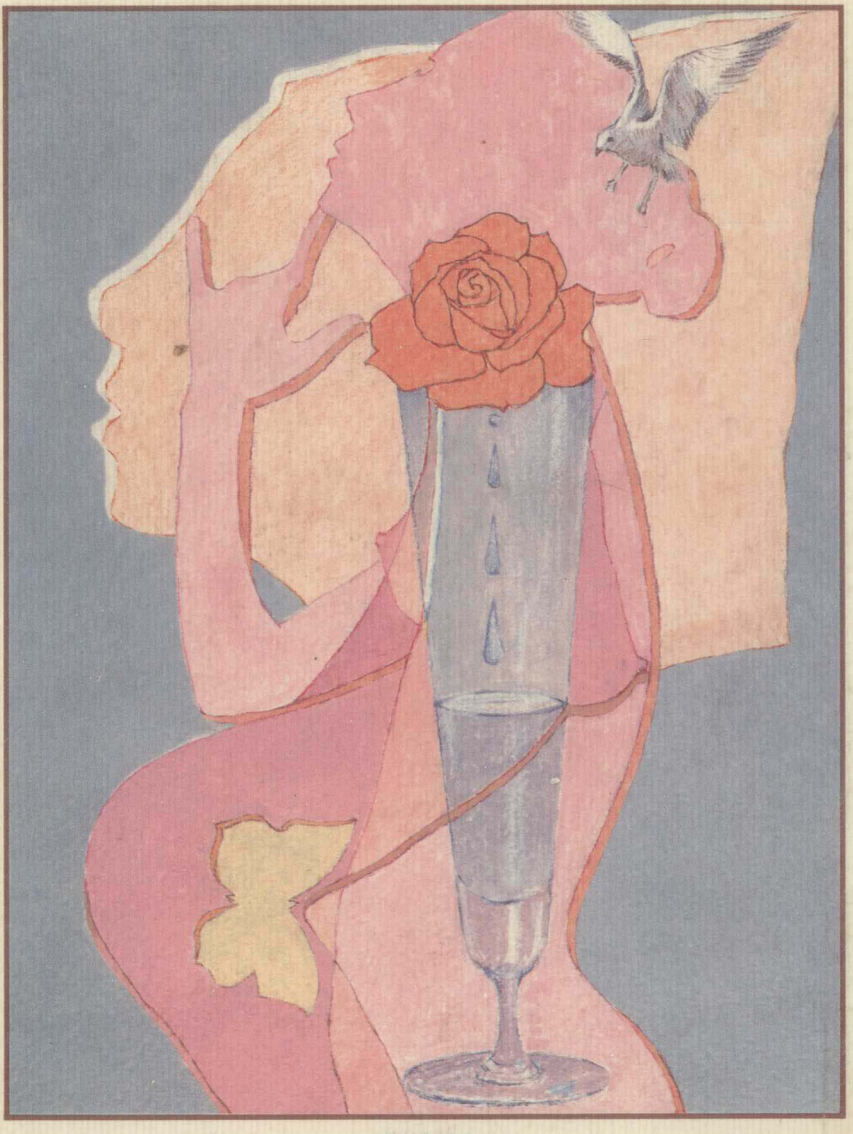
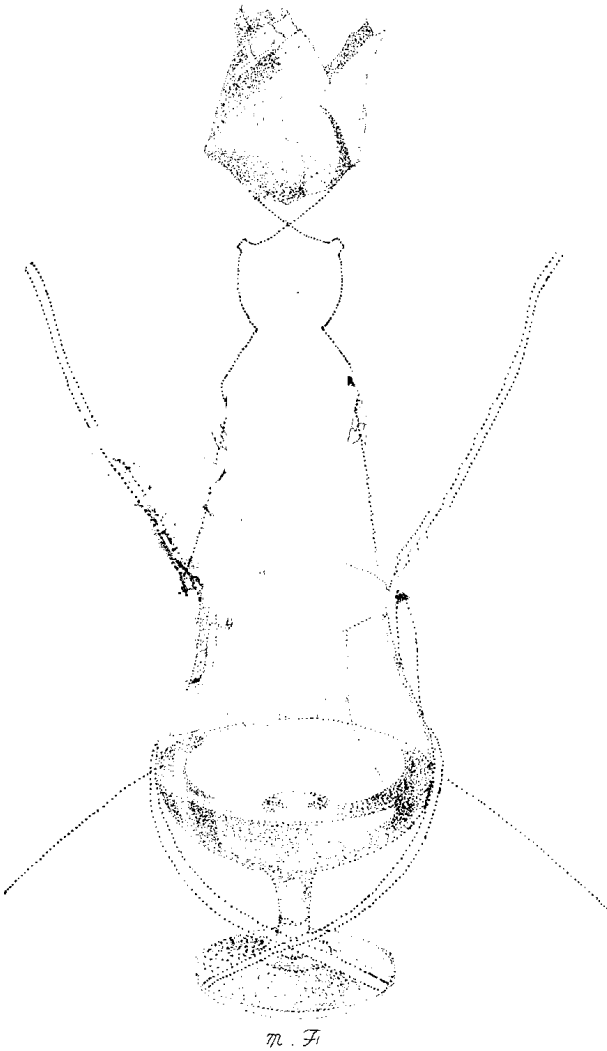
薔薇ぐるい

清岡卓行



新潮社

清岡卓行



新潮社

薔薇(ばら)ぐるい
定価　一二〇〇円

印　刷　昭和五十七年九月十五日
発　行　昭和五十七年九月二十日
著　者　清岡卓行(きよおかたかゆき)
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町七一　振替　東京四―八〇八
電話　業務部03(266)五一一一　編集部(266)五四一一
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

©Takayuki Kiyooka, 1982 Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

薔薇ぐるい　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　初　診……7
第二章　手　術？……45
第三章　ふしぎな休暇……77
第四章　真　夏……154
第五章　クラリネット……238

装画・挿絵　福島　誠

薔薇ぐるい

第一章　初　診

五月上旬のある朝の八時半ごろ、爽やかな日光と空気のなかを、宮川康平を乗せたオレンジ色の小型乗用車が緩やかな速さで走っている。幅の広いまっすぐな舗道はほんの心もち下り坂で、朝のそんな時刻のせいか、自動車の群れで混んでいない。彼は若い女性が運転する車の後方の座席に一人で坐っている。彼女の運転ぶりには、まだ初心者らしい緊張が感じられる。

フロントグラスを通して、康平は遙か前方の道路の上にガードが架かっているのをみとめた。そのすぐ左側に国電のQ駅が接続するという、彼にとってはずいぶん昔なじみの光景である。ああ、またこんなときにここを通るのか、と康平はふしぎな気持ちにとらわれた。その気持ちには、不吉なものが迫っているかもしれないという微かな怖れも、含まれているようだ。

「もう、二十五年ぐらい昔になるかなあ……。ほら、道路の先にガードが見えるでしょう、あのガードをね、私は夜中にタクシーに乗って、向こう側からくぐったんですよ。母が危篤のときです。二月の冷えこむ夜中でね、世田谷区の下宿から練馬区の親類の家まで、タクシーを飛ばした

んです、死ぬまえの母に会いたくてね……」

康平は唐突に、ある深い感慨をこめるような調子でしゃべった。そして、ずれた眼鏡をかけなおした。

「まあ、そんなことがあったんですか」

北原涼子は、思いがけない話に少し面喰ったような、そして少し困ったような、平静な声で調子を合わせた。前方を視つめたまま、頭はまったく動かさない。

二人のあいだには淡い親しさしかない。

宮川康平は都心にあるL大学の文学部日本文学科の教授で五十五歳、北原涼子はその学科の四年生で二十二歳である。二人きりで車に乗っているのは、偶然に近いようなきっかけからだ。

「そのころ、先生は学生だったんですか?」

涼子が沈黙のつづくのを破った。

「いや、大学を出て五年ぐらい経っていましたかね。やっと非常勤の教師の職にありつけたころです」

道路の右側に大きな会館が現われ、左側は駅のすぐ近くまでつづく商店街になった。朝の光の中でどの扉もまだ開かれていない。

「ガードをくぐったそのときはね、〈命なりけり〉というわけじゃないけれど、人生ってものはふしぎだなあと思いましたよ。というのはね、そのときよりさらに十三年ぐらい昔になるんだけれど、私は旧制高校受験の浪人でしてね、この近くに下宿していたんです。戦争中のことです。その下宿は空襲で焼けて、もう残っていないけれど……。そういうわけでね、このへんはじつは、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

私の十六、七歳ごろの思い出の場所でもあるんです」

康平はこうつづけた。

「じゃ、そのころ、ロマンスもいろいろあったんでしょうね」

涼子はぎごちなくなりそうな雰囲気を和らげるように言った。

「そりゃ、ハイティーンのころですから……。でもね、戦争中だったし、おまけに、物資の欠乏がしだいにひどくなってきていたし、それどころじゃない暮らしでしたね」

「じゃ、色気よりも食い気ですか？」

「ははは……」

康平はやっと笑い声を出した。そして、相手の言葉を、わざと大人ぶってみせ、どこか無理をしたもののように感じた。

自動車はもうしばらくでガード下の薄暗がりの中にはいろうとしている。二人の話がとだえ、康平はふと視線をあげてガードを眺めた。その横腹には白い看板が張られ、黒い文字で大きく横書きにされた交通安全の標語が出ている。「交通安全　アッ危ない　そのスピードが　死を招く」。

標語の終りにあらわれた「死を招く」という不吉な語句が、彼の胸に不意に重たくかぶさってきた。ふだんなら、町の中のこうした標語にはほとんど関心をもたず、ろくに読みもしないくせに、視線を横に走らせてなぜか丁寧に読んでしまい、最後のところでぎくりとなったのである。まるで自分の今行っていることが「死を招く」ものであるかのような、恐怖をともなうそんな妄想を、一瞬いだいたのであった。

康平はZ総合病院へ行くのである。その病院は、ガードをくぐりぬけて、そのままっすぐ脈

やかな商店街を三百メートルほど進み、左に曲がるとすぐ右手にあらわれるはずだ。彼は昔、受験浪人の少年であったころ、そのへんも散歩の途中でよく通っている。今度、地図で病院の所在地を探したとき、ああ、あの通りだな、とはっきりわかった。ただし、戦争中の昔、同じ場所にどんな建物が立っていたか、なにも立っていなかったか、まるで思い出せない。とにかく、およそ三十八年ぶりでその通りに立つわけである。

「ここでいいですよ」

康平は道路を隔てた病院の前で車を止めてもらった。車道を歩いて渡らなければならないが、少しでも早く着くほうがいい。

「じゃ、お大事に」

涼子は手を伸ばして左側の一つだけのドアをあけ、助手席の背を前に倒し、彼が外へ出られるようにした。長い黒髪が、若若しくひきしまった横顔をなかばかくしている。やや釣りぎみに切れた二重瞼の眼が、鋭く澄んでいる。化粧せず、上唇のすぐ上にうぶ毛の細く淡い線の走っているのが、素朴な感じだ。

「いやあ、ずいぶんお世話になりましたね。おかげで助かりましたよ」

康平はそう言って、会釈しながらドアをしめた。黒く太い縁の眼鏡をかけた謹厳そうな丸顔は、微笑むとずいぶん人懐こい感じになる。髪はまだ黒く、薄くもなく、五歳ぐらいは若く見える。中背でやや肥満しており、濃紺の背広がやや窮屈そうに見える。

涼子も一礼して、軽く右手をあげた。

黄土色で四階建のZ総合病院は、外観がいくぶん古い感じで、おまけに薄汚れていた。内部に

はいってみると、やはり古めかしい。天井も低く、廊下も狭く、各部屋もこぢんまりしているようである。しかし、清潔であり、午前九時の外来の診察開始までまだ二十分ほどあるのに、静かに緊張した勤務の空気がすでに漂っていた。診察券を受付に前もって早く出したのだろう、患者が三十人ほどあちこちの長椅子に坐っている。

東京西北部の郊外のV町に住む宮川康平が、どうして副都心にかなり近いZ総合病院まではるばるやってきたかというと、彼にとってただ一人の親しい医者、旧制の中学校で級友であった開業歯科医、猪狩順太郎がすすめてくれたからである。Z総合病院の副院長は、自分が最初に勤務した病院で仲のいい同僚であった人だからと、紹介の電話もかけてくれたし、紹介状も書いてくれた。今日の午前にその副院長が胃腸科の外来に出るのである。遅く行くとかなり待たされるから、診察開始少し前に着くといいということであった。

康平が診察申込書を受付の近くにおかれた机で書いていると、誰かが横に立って、自分の記入している文字をじっと眺めている感じがした。ちらっと横眼で見てみると、濃い青のジーンズの上下で、女性である。おやっと思って顔をあげてみると、やはり北原涼子であった。

「まだ、いたんですか！」

康平は驚いたような声をあげた。

「病気の先生をほうって行くのが、なんとなく気になったものですから」

涼子の眼には、なるほど、相手を気の毒がっている光がある。もともとは色白と思われる顔が、初夏の爽やかさにふさわしく、スポーティな感じに日で焼けている。

「大丈夫ですよ、世間知らずでも。自分の病気のことなんだから、一所懸命やるでしょう」

康平はそう言って笑った。
彼女はそれでも、彼が診察申込書と健康保険証と紹介状をそろえて受付に出すところまで見ていた。
「じゃ、失礼します」
「朝早くから、ほんとに恐縮でした」
もう一度別れの挨拶がかわされた。
涼子は出入口のドアに向かった。女性としてはかなり背が高く、康平よりほんの少し低いくらいである。長い髪が背中に垂れている。細くくびれた腰部から、まだ贅肉がついていない臀部へと、いわばすっきりふくらんだ線。それが歩みのために揺れている。
康平は廊下をしばらく歩いて、胃腸科の前におかれている長椅子数列の一隅に坐った。先客が三人いる。自分の番までしばらく待たなければならない。彼はやっと一服できる気持ちになって、鞄から、海苔まき煎餅の一個ずつ透明な紙袋にはいったもの数個を取りだし、それを食べることにした。朝食がずいぶん早かったので、みぞおちのへんがそろそろ痛んでくるかもしれず、先手を打つのである。
康平は頭の中に、ここ五か月ほどの自分の身体の異常を、また順を追ってよみがえらせた。病気の正体をなんとか素人の勘でつかまえようとするために、くりかえしてきた記憶の整理である。副院長に要領よく説明するためには、それをさらに簡潔にしなければなるまい。
今にして思えば、はっきりした症状が出たのは昨年の十二月下旬であった。それまでも一か月ほどは、空腹時に胃のへんがときどき痛むなど腹の調子があまりよくなかったが、勤務先のL大

学日本文学科の専任教員の忘年会で、お酒の度をすごし、すき焼きを食べすぎたのが引き金になったようである。そのあと二日間、初めての黒い便であった。それは今から考えると下血にちがいないのだが、そのときはぎょっとしながらも、牛肉の食べすぎだろうと思ってすました。その後は腹の調子が特に悪いということはなかったが、以前にくらべておくびが多くなっていた。

一月半ばから三月初めにかけて風邪をこじらせ、喉をいためた。その間腹の調子はおくびのほかは異常がなかったが、四月にはいってからおかしくなった。新学年で顔触れのやや変った日本文学科の常勤・非常勤教員の顔合わせ会、親類の葬儀、卒業生数人の自宅への来訪、知人の文芸評論家の出版記念会など、数日おきにお酒を飲む機会のつづいたことが影響したと思われるが、それもよくはわからない。とにかく、食事のあと二、三時間でみぞおちのへんが痛くなったり、また、夜中眠っているときに同じところが痛くなって眼が覚めたりするようになった。

なにか食べると痛みが消えるから、これは十二指腸潰瘍ではないか？　いや、食べずに我慢していても痛みはやがて消えるから、もしかしたら胃潰瘍かもしれない。家にあった家庭医学書二冊、それぞれ十五年前と七年前に出たものによって、こんなふうに考えた。しかし、このように心配しながらも、そのうち治るのじゃないかと、食事にとくに配慮するわけでもなく暢気にかまえたのであった。

今度の引き金は、お粥と、デパートで買った好物の若鷺の南蛮漬という、どちらも前夜の食事の残りの冷えたものを、昼食で腹いっぱい食べたことにあったようだ。五月初旬の連休のある日のことで、つぎの日から三日間、黒い便であった。前回とはちがって、脳天に一発くらったような、大きなショックであった。家庭医学書で知識も少しふえていたので、これははっきり下血だ

と判断し、すごく不安になった。十二指腸潰瘍か胃潰瘍。いや、もしかしたら悪性の病気。いずれにしても、たぶん手術だろう。こんな思いが頭の中をぐるぐるめぐった。そのころからは、食事のすぐあとに胃の痛むことも多くなった。

さて、このような経過を、副院長に要領よく説明するためには、どんなふうに簡潔にまとめたらいいだろうか？　康平はいくつかの要点を選ばなければならない。

しかし、康平はしばらくのあいだぼんやりしていた。少し疲れていたのだろうか。病院の廊下の天井や壁や床をどうということもなく眺めたり、立ちあがって廊下の一隅に行き、小さな書棚に備え付けの娯楽の本数冊のうちから、旅行の本を手に取ってぱらぱらめくったり、元の長椅子に戻って、眼を閉じ、なにも考えずに頭を休めたりしていた。

もう、診察開始の時刻である。だれだれさん、内科の何番室におはいりください、といったアナウンスの看護婦の声が、廊下の壁の上方に取り付けられた小さなスピーカーから、ときどきかすれて聞こえはじめた。康平は内科の中の別枠として設けられた胃腸科の診察室に、たぶん四番目に呼ばれるだろう。同じく胃腸科前の長椅子数列の中に、男一人女二人の先客の患者が坐っている。

その患者は三人とも七十代に見え、どの顔にも深刻そうな表情はない。三人がのんびりとした間をおいて天気や世間の話をするのを聞いていると、病院で顔見知りになった間柄のように想像される。なるほど、このごろは老人医療費無料にかかわって、病院には高齢の患者が多いと聞いていたが、このいくぶんのどかな光景も、そうした事情に無縁ではないのだろうと感じられた。アナウンスが三人のうちの二人を同時に呼び、一人は診察を受けるように、もう一人はその横、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com